

ヒマワリの播種期と栽植様式

丹 野 武 彦・大久保 秋二郎・佐 藤 康 徳*

(宮城県農業センター・*大和農業改良普及所)

Seeding Time and Planting Pattern in Sunflower Cultivation

Takehiko TANNO, Syuziro OKUBO, and Yasunori SATO*

(Miyagi Prefectural Agricultural Research Center.)

(*Taiwa Agricultural Extension Service Station)

1 はじめに

本県におけるヒマワリは、県北部地域の特産物として、1983年から栽培が始まり、現在約40haほどが作付けされている。しかし、本県における栽培法（播種期と栽植様式）で未確立の面があったため、このたび試験を行ない検討したので報告する。

2 試験方法

- (1) 試験年次：1988年～1990年
- (2) 供試品種：1) 油料用 IS-894 (1988年)
IS-3001 (1989～1990年)
2) 食品用 IS-954 (1988～1990年)
- (3) 試験区の構成：ア、播種期 5月2日・5月15日・5月30日
イ、栽植様式 畦幅×株間：80cm×20cm (625株/a),
110cm×20cm (455株/a), 80cm×30cm (417株/a), 110cm×30cm (303株/a)
- (4) 耕種概要
1) 施肥成分量 (kg/a)：N-1.0, P₂O₅-1.5, K₂O-

1.0 (全面散布後、土壌と混和)

2) 播種法：1株2粒播種（手播），発芽後1本に間引く

3) 中耕培土：草丈40～50cm頃，管理機にて1回行う

(5) 実施場所：所内，礫質褐色森林土（埴壌土）

3 試験結果及び考察

油料用ヒマワリの生育及び収量を表1に，食品用ヒマワリの生育及び収量を表2に示した。ヒマワリの生育と収量は，天候による年次間変動が大きい。1988年は少照多雨の経過で7月は極端な低温，1989年は7月下旬から8月上旬までは低温少照となり，8月6日と8月27日の二度の台風が襲来した。

このため，両年とも空胴病の多発と倒伏及び登熟不良により低収となった。また1990年は，8月に二度の台風襲来があったが被害が軽く，全般に高温多照と少雨経過のため多収となった。栽植密度別に見ると，各播種期とも密植区ほど稈長が長く，稈径が細く徒長気味となり，花冠径と千粒重は小さくなった。しかし，収量は最も高くなったことから，更に密植にした場合の収量の増減について検討の余地があると思われる。

表1 油料用ヒマワリの生育及び収量

播種 月.日	栽植 密度 (本/㎡)	開花 月.日	収穫 月.日	登熟 期間 (日)	稈長 (cm)	稈径 (cm)	花冠径 (cm)	a当り 子実重 (kg)	同左比 (%)	千粒重 (g)
5 月 2 日	625	7.16	8.14	30	178	3.1	15.9	15.5	118	37.3
	455	7.14	8.14	32	181	3.2	17.3	14.6	111	40.3
	417	7.15	8.14	31	169	3.3	17.6	13.0	99	46.0
	303	7.15	8.14	31	159	3.4	19.6	13.1	(100)	44.9
5 月 15 日	625	7.26	8.21	27	182	3.2	16.9	18.5	141	49.3
	455	7.25	8.21	28	180	3.2	17.6	16.9	129	41.9
	417	7.25	8.21	28	168	3.3	17.0	15.1	115	55.7
	303	7.26	8.21	27	161	3.4	20.0	14.7	112	53.0
5 月 30 日	625	8. 5	9. 4	31	166	2.9	16.9	21.8	166	54.7
	455	8. 5	9. 4	31	168	2.9	17.0	16.8	128	56.1
	417	8. 4	9. 4	32	154	3.0	18.5	17.2	131	62.2
	303	8. 5	9. 4	31	152	3.0	18.8	13.8	105	60.5

注. 平成元年～2年の平均値

表2 食品用ヒマワリの生育及び収量

播種 月.日	栽植 密度 (本/㎡)	開花 月.日	収穫 月.日	登熟 期間 (日)	稈長 (cm)	稈径 (cm)	花冠径 (cm)	a当り 子実重 (kg)	同左比 (%)	千粒重 (g)
5 月 2 日	625	7.12	8.15	35	187	3.0	15.1	25.8	147	104.8
	455	7.12	8.15	35	182	3.3	16.9	21.2	120	111.2
	417	7.12	8.15	35	176	3.3	16.8	21.4	122	112.8
	303	7.12	8.15	35	167	3.6	18.8	17.6	(100)	124.3
5 月 15 日	625	7.24	8.21	29	200	3.2	16.6	21.5	122	98.6
	455	7.24	8.21	29	189	3.4	16.4	17.4	99	99.1
	417	7.24	8.21	29	190	3.4	17.4	16.9	96	105.8
	303	7.23	8.21	30	181	3.9	18.6	15.5	88	107.5
5 月 30 日	625	8. 8	9. 2	26	193	3.0	14.5	20.8	118	95.4
	455	8. 8	9. 2	26	189	3.2	14.9	15.5	88	106.4
	417	8. 8	9. 2	26	186	3.1	15.4	14.8	84	98.2
	303	8. 8	9. 2	26	182	3.3	15.7	12.0	68	101.0

注. 昭和63年～平成2年の平均値

播種時期別の収量は、油料用と食品用品種で異なった傾向が見られた。油料用では5月30日播種、食品用では5月2日播種で収量が高まった。これは、品種間の生育適温の違いと、それに伴う千粒重の差異が収量に關与しているのではないと思われる。5月2日播種の開花月日は、食品用の方が油料用より2～4日早まり、登熟期間も3～5日長くなった。

5月30日播種では、油料用が食品用より3～4日開花が早まり、登熟期間も5～6日長くなった。

このことにより、油料用では5月30日播種の方が5月2日播種より千粒重が大きく、収量が高まり、食品用では5月2日の播種の方が5月30日播種よりも千粒重が大きくなり、収量が高まったものと思われる。

今回供試した品種は、現在県内で栽培されているもので、播種時期により品種間に生育の差が見られたことから、食品用では6月播種、油料用では4月播種についての検討の余地が残されている。

4 ま と め

宮城県におけるヒマワリは、県北部地域の特産物として栽培されている。しかし、播種期と栽植様式などの栽培法に未確立の面があったので、1988年から1990年まで検討を行った。

播種期は、5月2日、5月15日、5月30日の3段階を設定して検討した結果、油料用ヒマワリ (IS-894, IS-3001) は、5月中・下旬、食品用ヒマワリ (IS-954) は5月上旬で高い収量が得られ、播種適期の目安を得た。栽植様式は、畦幅80cm・110cmと株間20cm・30cmの組合わせ (栽植密度625～303株/a) で検討した。その結果、油料用、食品用とも収量は密植の方が高まる傾向にあり、畦幅80cm×株間20cm (625株/a, 一本立て) 区が高い収量を得た。

引 用 文 献

- 1) 犬山 茂. 1987. 日本の特産農作物. 312-317.